劉師培の「國學發微」について
―中國における「國學」成立の一側面―

末岡　宏

一九世界紀末から二〇世界紀初頭にかけては中國の社會・文化が大きく變化した時期である。この時期、中國では傳統的な學術を「國學」呼ぶようになった。近年中國において「國學」の成立に關する研究、書籍が多數著されており、[1]その主眼は「國學」とはどのようなものか、どうあるべきかという點に關心があると思える。中國の「國學」とはどのようなものであるべきかという問題は、外國人が論ずる性質の問題ではないだろうし、論ずるにしてもかなり愼重な態度が要請されるのであろう。本稿では、「國學」とは何か、どうあるべきかという問題とは別に「國學」草創期にあって「國學」を主張した『國粹學報』では「國學」とはどのようなものと考えられていたかを考察することを目的とする。

さて本稿で考察の對象とする『國粹學報』は一九〇五年二月二三日（光緒三十一年一月二〇日）黃節、鄧實、劉師培らによって上海で國粹保存會の機關誌として創刊された雜誌であり、一九一一年三月第八十二期で停刊するまでおおむね月一回のペースでまで刊行された、「國學」草創期を代表する雜誌である。[2]その目的は「發刊辭」に續く「國

粹學報略例」の第一項に「國學を發明し、國粹を保存することを宗旨とする」（「以發明國學保存國粹爲宗旨」）と述べるように、國粹を保存することを目的としている。ただし、「發刊辭」「略例」では雜誌の題名となっている「國粹」と「國學」の關係については特に論じられてはいない。

一、『國粹學報』について

『國粹學報』創刊號には、「發刊辭」「國粹學報略例」に續いて、黄節の「敍」潘博の「敍」鄧實の「國學保存會小集敍（國學保存會簡章）」等が掲載されている。その中でも黄節の「國粹學報敍」は創刊した中心人物である黄節が「國學」をどのようなものと考えていたか、ひいては『國粹學報』が「國學」をどのように捉えていたかがわかる。黄節の「國粹學報敍」は、第一に「中國」及び中國の「學」が宋末以降滅びたこと、次に近年西洋の學が流入することによって中華民族ひいては「中國」、中國の「學」が滅びようとしており、更に日清戰爭後西洋化（歐化）した日本の影響が大きくなることにより危機が大きくなっていることを強調し、最後に、イタリアのルネッサンスにおけるダンテや日本の三宅雄二郎同樣自國の傳統的學術を復興するために『國粹學報』を發刊することを宣言している。つまり、この「敍」で重要な點は三點ある。まず第一に、國と學が一體のものであって、中國では國も學も亡びようとしていること。第二に、歐米の學術を受容することにより國學が滅びようとしていること。第三に、國粹保全が必要であることである。

第一の點で注意すべきなのは、國學という概念にかかわることであるが、中國の「學」を「黄帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔子の學」すなわち孔子以前に成立したものとしている點、しかし具體的な内容には觸れていない點である。また「敍」の前半部で、古い時代に言及する際には、「國學」という言葉は用いず、「國」「學」を用い、場合によっては「國界」「學界」という單語を用いている點も注意しなければならない。

第二の點であるが、黄節は「國粹學報敍」で、西洋諸國の學問を取り入れることになったことが國學衰退の原因だとし、甲午の役以降は日本を經由して西洋の學問が流入し、中國の傳統的學術が見捨てられたことに對して批判している。特に、日本を經由した西洋の學問の流入を批判するのは『國粹學報』に共通する意識であろう。それは「略例」で「近日の東瀛の文體の粗くて淺薄な惡習を一洗する」と唱って日本の新語等が流行するのを批判するのと同じ意識であって、日本が西洋の學問を取り入れることに對して「歐米の學術の受容について「わが國學を滅ぼすものは西洋ではなくて日本である」（嗚呼、亡吾國學者、不在泰西而在日本乎）と批判しているのである。つまり黄節は、西洋の學術を輸入することによって中國固有の文化が失われることを懼れているわけである。また、我が國學を滅ぼすものが日本であると主張するが、これは當時、中國で同文同種とされる日本への留學が勸められたことの裏返しであると考えられる。つまり『國粹學報』の「國粹」保存の主張の背景には中國が歐米化されることに對する反感があるのは確かである。この點は、「今から二十年の間、私は外國思想が輸入されないのを心配はしない、私はただわが中國の學術思想が明らかにされないことを心配するだけだ。」という梁啓超の「論中國學術思想變遷之大勢」[1]と意識を共有していると考えられる。

最も注目すべきなのは第三の國粹を主張する部分で、日本の反歐化運動としての國粹主義に言及している點である。

ここではイタリアの學術を復興させたダンテと竝んで日本に觸れている。ここで黄節は「昔、日本の維新では、諸藩や幕府を返還し、國を擧げて歐化主義は國中にはびこったが、三宅雄二郎、志賀重昂等が、雑誌を創刊し國粋保全を倡えた、そうして日本主義が、ついに成立したのだ。」というように、日本は明治維新後、西洋化が進んだが、三宅雄二郎、志賀重昂らが雑誌（「日本人」）を發行し國粋保全を主張することで、日本主義すなわち國粋主義が成立したことが述べられている。（「昔者日本維新、歸藩復幕、擧國風靡、于時歐化主義、皓皓滔天、三宅雄二郎、志賀重昂等、撰雑誌倡國粋保全、而日本主義、卒以成立。嗚呼、學界之關係于國界也如是哉。」）ここで言及される三宅雄二郎とは三宅雪嶺のことであり、國粋保全を主張したのは三宅雄二郎（雪嶺）・志賀重昂らの政教社である。黄節はこの政教社グループからの影響を受けている。そもそも冒頭で述べた「略例」の「國粋を保存する」というのは、三宅雪嶺自身が「明治二十一年神武天皇祭に一雑誌が出て國粋保存を唱へた。幾千もなく保存といふの不適當なるを顯彰と改めたが、既に國粋保存の名が廣く世界間に傳はり其の儘に通用することとなった」というように、三宅雪嶺たちが保存を顯彰と改めたにもかかわらず當時廣く通用した用語なのである。[5] もちろん『國粋學報』では漢語の語順に直して「保存國粋」とするのであるが、黄節のこの言及からしても明治二〇年代に日本で流行していた「國粋保存」の語をそのまま用いていることは明らかである。つまり、前項で一足早く西洋化を進めた日本に對して警戒を抱くと同時に、その西洋化への反對運動として政教社の日本主義が取り上げられているのである。そして「ああ、學界と國界の關係はこのようなものであろうことか。（嗚呼、學界之關係于國界也如是哉。）……そもそも國學とはわが國界を明らかにしてわが學界を定めるものなのだ（夫國學者、明吾國界以定吾學界者也）。」として、國粋を國學と結びつける。

日本の明治中末期の三宅雪嶺らの國粋主義は、鹿鳴館時代の行きすぎた西洋化（歐化主義）に對するアンチテーゼ

として捕らえられているようである。しかし、我々が最も違和感を覺えるのは、「國粹主義」と「國學」がすぐに結びつく點である。近代日本思想史を考える際には、明治二〇年代の鹿鳴館時代の過度な西洋化（歐化）に對するアンチテーゼとして國粹主義を捉え、幕末に流行した國學とは別のものと考えるのが普通である。藤田大誠[6]が指摘するように、從來（日本の）「國學」とは近世（江戸中期に以降から幕末）の思想運動であって、中でも平田派は明治維新の思想的背景となったが、近代に入ってからはその影響力を失っていたと考えられている。つまり、一八七〇年（明治三年）大學校において國漢兩派の對立抗爭の末大學本校が閉鎖されたこと[7]、一八七一年（明治四年）の平田派國事犯事件以降國學は歴史の表舞台から降りた、とされるのが通説だからである。つまり、日本の近代思想史において政教社の「國粹主義」は「國學」とは異なるものであり、三宅雪嶺・志賀重昂の國粹主義は、單なる復古主義ではなく、志賀重昂が「大和民族をして、冥々隱約の間に一種特殊なる國粹（Nationality）」[8]というように、むしろ新たな西洋的な概念である nationality に基づいて主張しているわけであり、この時點で考えられている國粹というのは、實は漢學の傳統及び國學の要素全體が想定されるのである。

國學とは異なるというのは國粹主義を主張する當人たちにおいてもそうである。志賀重昂は前掲『日本人』が懷抱する處の旨義を告白す」で、鹿鳴館時代の西洋化を「塗抹旨義」として否定するのであるが、「彼の所謂國學者流の口吻に倣ひ、漫りに神國、神州、天孫等の文字を陳列するものにあらず」と日本の國學を否定した上で、「國粹保存」を主張している。つまり、志賀重昂は「國粹」と「國學」は別のものと考えられているのである。また、當時「國粹保存」という用語が清末の知識人で流行していたことに關しては、狩野直喜が「支那近世界の國粹主義」[9]で「支那で國粹保存などいふ事を唱へ出したのは極めて近年のことで、以前には全く無かったのである。」と述べ、「新名詞

嫌ひの張之洞」でさえも創立存古學堂折で使うようになっているが、經典や近人の文集にも見られない、日本に留學してきた清國留學生等が輸入してきたものである、と指摘しているように、「國粹」という言葉はもともと中國にあった言葉ではなく日本からの輸入語であった。ここで狩野直喜は清國で「國粹」が流行することに對する違和感を表明しているだけだが、その裏には日本の國粹主義への反發もあり、また「略例」第一條の「發明國學、保存國粹」のように「國粹」と「國學」の竝列することに對する違和感があったのではなかろうか。

初期の國學については坂元ひろ子、[10] 鄭師渠らが既に言及している通り、明治期の日本の國粹に影響を受けている。それは黄節「國粹學報敍」や「發刊辭」によって明らかである。「國粹」がどのように使われるようになったかについては、先行研究を參考にして、まずその中の主なものから「國學」成立について考えてみたい。

「國粹」について張岱年主編『中國哲學大辭典』（上海辭書出版社二〇一〇年）では、梁啓超の「中國史敍論」[11] が用例としてあげられている。實際一九〇一年に『清議報』第九一册に掲載された「中國史敍論」第六節「紀年」に中國で西暦が使えない理由として「以中國民族固守國粹之性質、欲強使改用耶蘇紀年、終屬空言耳。」と述べられている。「新民説」「論私德」（一九〇三年）にも見られることから、梁啓超は「國粹」の語をかなり普通に使っていたと考えてよいだろう。

また「國學」は『漢語大詞典』によれば「①古代指國家設立的學校。（『周禮』春官・樂師、「樂師掌國學之政、以教國子小舞」、）②指我國固有的文化、學術。胡適『國學季刊發刊詞』（一九二三）」とあり、國學とは近代以前においては隋以降の國子監を指したものであることがわかる。桑兵によれば「國學」については、一九〇二年末梁啓超と黄遵憲に「國學報」を創刊する計畫があり、それが端緒だという。このことは黄遵憲の梁啓超宛ての書簡で確認できる

が、[12] 書簡によれば梁啓超の「國學史」の概要はこの時點でできていたようである。ただし、この『國學報』は結局刊行されずに終わってしまう。馬克鋒[13]によると梁啓超が作成していたものが「論中國學術思想變遷之大勢」であるとされている。確かに「論中國學術思想變遷之大勢」は前述のように中國の學術の復興を願う點でも國粹學報と意識を共通する。この時黄遵憲、あるいは梁啓超の國學とはどのようなものであろうか。確かに「論中國學術思想變遷之大勢」には「國學」「國粹」の語が使われており梁啓超においても國學と國粹は一體のものとして使われていると考えてよい。[14] ただし、梁啓超は「國粹」「國學」を積極的に使おうとはしなかったようである。

一九〇二年『譯書匯編』に掲載された「日本國粹主義與歐化主義之消長」[15]は、中國で國粹主義に觸れた最初期の文であるが、その中で日本に國粹主義と歐化主義の二派あるとした上で、幕末を純粹國粹時代、明治初年から明治一三年、一四年を國粹主義から歐化主義に移行する時代、その後十年を純粹歐化主義時代、明治二八年以降を歐化主義から國粹主義に復歸する時代としている。ここでも國粹主義と國學を區別はしておらず、日清戰爭以降の國粹主義を幕末への復歸ととらえ、反歐化主義と捉えているわけである。ただし、ここでの結論は、歐米諸國との競爭が避けられない状況の中で歐化主義を經過することは必要であるということになっている。しかし、ここから讀み取れるのは、歐化主義に對する警戒感、反發の感情である。確かに歐米との生存競爭の中では歐化主義は避けられず、國力を盛んにするためには歐化は必要であるが、その後はやはり國粹に復歸するべきだと主張している。

「日本國粹主義與歐化主義之消長」の論者は、「日本の歴史に徵して」歐化主義の方がよいとしているのであるが、當面の方策としてという限定があって、心情的には國粹主義に共感しているようである。そして現状の日本の國粹主義を必然的な結果と捉えているようである。そして中國においては、急いで國粹を守ることを圖るよりも、まず歐化

を進める方がよいという、結論を出している。ここで、明治維新以前の日本國學の全盛期を「純粹國粹主義時代」としており、日本における「國學」も「國粹主義」と表現している。

以上、黄節「國粹學報敍」に觀られる『國粹學報』の創刊時の主張をまとめてみると、「國學」は「國粹」とほぼ同じものとして使っている點が特徴である。「國粹保存」の主張は、もとは政教社グループの「國粹主義」にその淵源があるが、日本の國粹主義者が自らの主張を日本の「國學」と嚴格に區別するのに對して、『國粹學報』では「國學」はほぼ「國粹」と同じ内容を指していると考えられる。

二、劉師培の「國學發微」について

前章では、國粹、國學という用語に對して様々な論者が與えた定義を見ることで、國學を明らかにしてきた。本章では劉師培の「國學發微」を通して、清末において國學とはどのようなものとして理解されていたのかを明らかにしたい。

「國學發微」[16]は『國粹學報』の創刊時から「叢談」欄[17]に掲載されたものである。一九〇五年一月の創刊號から十四號（一九〇六年第二號）まで連載され、更に十七號（一九〇六年第五號）及び二十四號（一九〇六年第十二號一一月刊）にも掲載されたところで、劉師培自身が翌一九〇七年二月には日本に渡ったこともあって未完のまま中斷してしまい、その後續編は書かれていない。劉師培の著作としては最も初期の著作の一つである

まず「國學發微」は章、節には分けられていない。今回は便宜的に、『國粹學報』の掲載號でひとまず分けておく。章立てはされていないが、おおむね時代順に記述がなされているので、掲載された各號ごとにその内容について紹介していきたい。

第一號にはまず序が掲載されている。序は「國學發微」が、『莊子・天下篇』『荀子・非十二子篇』班固『漢書藝文志』、劉勰『文心雕竜』劉知幾『史通』章學誠『文史通義内外編』鄭樵『通志』を嗣いで諸家の學術を集め、その内容を解明し分類したものだと、著作の意圖を述べている。

以下各號の内容を列擧する。

第一號

六藝の起源は、章學誠の六經皆史説をあげた上で、六經はもともとはすべて周公あるいはそれ以前の古代の聖王の舊典である。

孔子はこれを編輯して孔子の學校の教科書とした。

孔子は六經・儒學だけでなく諸子百家すべて學を習得しており、儒家にはその傳統が受け繼がれた。

第二號

諸子の學術は、西洋の學術に符合する様々な分野を含んだ幅廣い内容をもったものである。

諸子の學術は、漢になっても殘っていたが、魏晉以降失われた。

第三號

西漢の學は、齊學と魯學の二つの學派があるが今文・古文の別はなかった。

西漢の初めには、儒學が盛んになってくるが、諸子の學説も殘っていた。

西漢の經生は複數の經に通じるものが多かった。

第四號

西漢の時の經學には今文學・古文學の爭いはなかったが、東漢になって今文學・古文學の爭いが起き、東漢末には古文が優勢となった。

東漢の經生は、家法は守るが、今文學・古文學を共に學ぶ者も多かった。

第五號

西漢の武帝が六經を表彰して以降、讖緯を用いた僞學が盛んになってきた。

東漢の帝王が經術を表章するようになると、經術が學術以外の政治の分野にも使われるようになってきた。

第六號

兩漢の經は様々な形で傳授されたが、家ごとに解釋が異なるという家法・官學が盛んになってきた。

儒生は複數の分野を學ぶことが普通であったが、東漢の末年になると一つの家法だけを學ぶようになり、鄭玄の學が盛んになってからは家法も失われた。

兩漢の間は諸子の説が失われておらず、儒者で諸子の學を學ぶ者も多かった。

第七號

東漢の末年になると諸子の學術が盛んになり、魏晉になると老莊・文學が盛んになった。

漢末には經を治める者は、みな鄭玄を尊崇するようになり、その他の諸家の家法が廢れてしまった。魏晉になると新たな經學が興り、漢代の家法が失われてしまった。

第八號

魏晉の間は漢代の儒者の家法は失われていなかったが、魏晉の經學が盛んになることによって漢代の經學の家法が失われてしまった。

南北朝の時、南朝では魏晉の經學を受け繼いだが、北朝では漢儒の家法は失われていなかった。

第九號

東周の儒家・道家は宗教ではなかったが、その後神仙術が盛んになったことで道教が生まれ、東漢に佛教が傳來した。佛教・道教は魏晉になると精緻になり盛んになった。

第十號

兩漢以前は經を講義することは少なかったが、魏晉以降經を講義するようになり義疏が興った。

東漢に學術が統一されて以降、唯一新しく生まれた南朝の玄學は、宋學の起源となった。

隋から唐初にかけて、學術は儒學に統一され、玄學・佛教は廢れた。

第十一號

漢代に經を學官に立てて經學統一が始まり百家の學が廢れたように、唐代の初め、五經正義を作成し注疏を統一したために、正義に採用されなかった兩漢魏晉南北朝の經説が失われてしまった。これ以降、經學・學術は衰えてしまった。

第十二號

唐の學術は、幅廣く調査はするが判斷が精密ではなく、學術が雜然としたものになってしまった。

第十三號

唐代になると道教、佛教が盛んになった。佛教は學術思想に影響を及ぼし、道學に影響を與えた。

第十四號

宋儒の經學は、理で經を説明するもの以外にも、事で經を説明するもの、術數で經を説明するものなど幾つかの派に分かれ、考證學の先驅けとなるものもある。

第十七號

宋儒の學術は、佛教・道教に起源を持つが、諸子百家の説と暗合するものが多い。

近儒は陸王の學を排斥するが、唯心派の良知説がルソーの天賦人權説と符合するなど一概に排斥できない。

第二十三號

元代になるとモンゴル族が中國を支配したが、元代の學術には清代の學術の起源となるものがあり、西學を輸入し始めるなど、見るべきものがある。

明人の學術は空疎な内容を議論するだけでなく、清代の學問の起源となる學術があり、尊重すべき點もある。

以上を通觀すると、「國學發微」は上古から明代までの經學を中心とした中國の學術史であることがわかるだろう。未完ではあるが、殘りは劉師培の言葉でいう近代つまり清代の學術の部分である。清代の學術に關しては一九〇七年に「近儒學術統系論」[18]や「近代漢學變遷論」[19]が發表されることとなる。

以上をまとめてみると劉師培の「國學發微」の特徴は次のようになる

・經書を上古からの聖人の記録であること
・經書は孔子の學校の教科書であること
・諸子百家の學は西洋の學術に符合する多様な學術が含まれていたこと
・諸子百家の學は兩漢の末までは滅びずに殘っていたこと
・兩漢では學者は複數の經書やそれに付隨して幅廣く諸子の學を學ぶものであったこと
・魏晉南北朝時代に流行した佛教・道教の影響を受けることによって、經學が變質してしまったこと
・魏晉南北朝時代に、それまで殘っていた様々な諸子や經學の學説が失われてしまったこと
・唐代の五經正義で解釋を統一することによって、それまでの多様な經學が失われてしまったこと
・宋代の經學は性理學での解釋以外に多様な經學があり、考證學の先驅となるものがあること
・明代の陽明學はルソーの天賦人權論に符合する面があること
・明代の經學は清代の考證學の起源となる評價できるものがあること

「國學發微」と關連があると考えられるのが『經學教科書』[20]である。『經學教科書』は「國學發微」連載と同時期の一九〇五年に第一冊が一九〇六年に第二冊が國學保存會から出版された。内容的には『經學教科書』第一冊の經學史の部分に重複する部分も多く、南北朝の經學の記述には全く同じ文もある。ただし、『經學教科書』は經の種類によって章を分けて記述しているのに對して、「國學發微」は基本的には時代順に記述しているなど、形式的には差がある。『經學教科書』には、隋唐の經學に關する記述がなく、魏晉南北朝の經學の次は宋明の經學となる。また「經學」教科書であるから當然でもあるのだが、『經學教科書』では諸子學には觸れることがなく、魏晉南北朝の道教・

佛教に關する記述、宋明の理學は取り上げない。隋唐の經學に關しては、「國學發微」で隋唐の經學、特に『五經正義』による經學の解釋統一をそれまで傳えられてきた兩漢以降の經學を滅ぼしたと述べており、『經學教科書』で敢えてとりあげなかった理由がわかる。また、宋學に關しても清代の學術の先驅として高く評價するために經學をとりあげたことがわかる。しかし『經學教科書』と「國學發微」は同じ時期の著作である上に、經學に關する主張はほぼ同じである。その兩書に共通する劉師培の主張の特徴は、漢代の經學の創出に重點を置き、特に鄭玄以前の東漢の經師を重視する點にある。この點は「國學發微」『經學教科書』だけではなく、その後の劉師培の經學に關する著作、例えば「春秋左氏傳答問」[21]と共通する內容を持っており、ほぼ變わっていないと言えるであろう。[22]劉師培は、樣々な學說が共存している狀態を理想としており、漢代の經師の說を高く評價するのは、この多樣な學說の共存という點にある。また「國學發微」で取り上げられる諸子學、魏晉南北朝の佛教・道教、宋明理學についての記述の部分では、西學に關する言及があり西學と符合する點が注目されている。

以上のことでわかるように、「國學發微」は『經學教科書』と共通する經學の部分と、諸子學・佛教・道教・宋明理學に關する部分に分かれると考えられる。そしてその記述の大半は「經學」についての說明であり、その他の部分は西洋の學術・文化との共通點を述べるのみで高く評價しているようには見えない。つまり、劉師培の考える「國學」とは經學そのものであった。そしてその經學とは、考證學・漢學と言い換えることができ、劉師培が幼少から學んできた經學そのものであって、「國學」あるいは「國粹」という問題設定から導き出されたものではないと考えてもよいだろう。

結論

第二章で考察した、國學を經學乃至漢學と同じものだとする認識は劉師培だけの認識ではなく、共に『國粹學報』を創刊した黄節や鄧方、あるいは『國粹學報』の讀者に共通する認識であっただろう。國粹學報第一號に掲載された「國粹學報略例」第一項に「國學を發明し、國粹を保存する」と述べるように、國粹と國學は發明するもの、國粹は保存するものとの違いはあるにせよ表裏一體の密接な關係をもったものであると考えられていることがわかる。つまり、中國の學者たちにとって、國粹を支えるのは疑いなく經學であり、それに加えて諸子學なのである。

第一章で述べたように、國粹と國學と經學とがほぼ同じものを指すということに對して我々が覺える違和感は。當時の國學に言及する時、無意識のうちに日本の國學を參照しているからではないか。當時の中國の學者にとって、國の粹とは國學に他ならなかったということだ。その認識は革命派の專賣特許だけではあるまい。春秋に示されるような華夷觀念によれば華と夷を分けるのは文化なのであるから、中華を中華たらしめている國の粹は、中國の傳統的な學術つまり經學に他ならない。また、佛教は中國から見れば外來の文化であるし、道教は佛教の影響を受けており、更に宋明理學は佛教・道教の影響を受けており、中國の學術とは言えない。また諸子學は當時考證學の發展に伴って再發見されつつあったとしても、一時は捨て去られたものである。とすれば、國粹という時、想定されるのは經學なのである。もちろん經學は一つではなく、康有爲・梁啓超らが孔子がすべての學術を孔子教として創造したという今文派が一方にあり、それに對抗して學術はおしなべて歷史的資料であるとする章炳麟・劉師培らの古文派が、漢民族

による民族革命を主張しており、その立場は大きく異なった。しかし、梁啓超の「論中國學術思想變遷之大勢」を見ても清朝あるいは中國の國民ないし民族のアイデンティティーはまず傳統的學術に求められるという意識は共通している。

ところが、日本においてはそれまでの複雑な經緯から、洋學、漢學、國學が三つ巴となって學術が變化してきた。國粹主義は、明治維新期の國學とは異なるものであるし、明治三〇年代から高まってくる國體の主張も國學とイコールではない。ところが清末の學者たちは、中國の國粹と國學を一體のものだとし、國學とは漢學（考證學）だとした。これは清末の學者たちが「間違えた」と捉えてはなるまい。中國が日本を特別な存在と認識し始めた時期、特に留學生が數多く訪れた明治三〇年代とは、明治二〇年代の所謂鹿鳴館時代が條約改定の失敗を機に終わり、その後の憲法制定、議會開設とそれに伴う過程における自由民權運動を經て、今の我々が考えるような明治、ないし戰前の日本が形づくられた時期である。本稿で考察した國學も、日本においては明治初期に一旦政治的に敗北したが、まず東京大學の別科古典講習科として復活していたわけである。もちろん久米筆禍事件のように、學術と國體との齟齬が生じたこともあるが、これは右傾化の結果とは言えまい。この古典講習科における國學の復興とでもいうものを當時の留學生は知っていたはずであり、その一端は「日本國粹主義與歐化主義之消長」にも伺えると思う。

劉師培が『國學發微』で示す「國學」とは、經學・漢學に他ならず、「國粹」と一體のものであった。「國粹」という用語・概念は日本が西洋化を進めた時代の後に生まれた明治二十年代の政教社グループが英語の nationality に相當するものとして考えた國粹に觸發されたものであった。

本稿では、同時代の日本の國學、特に東京大學の古典講習科、あるいはその後の皇典講究所に至る近代日本の國學

との關係については調査不足のため論ずることができなかった。また劉師培以外の國粹主義者、例えば國粹學報の他の記事の特徴についても十分には論じることができなかった。この點については今後の課題として別稿として論じたい。

注

(1) 近年の中國における國學研究には下記のものがある

鄭師渠『國粹、國學、國魂 ―晚清國粹派文化思想研究』台北・文津出版社一九九二年

鄭師渠『晚清國粹派文化思想研究』北京師範大學出版社二〇〇〇年

桑兵『晚清民國的國學研究』上海古籍出版社二〇〇一年

馬克鋒『國學與現代學術』廣西師範大學出版社二〇一〇年

陳壁生編『國學與近代經學的解體』廣西師範大學出版社二〇一〇年

宋洪兵編『國學與近代諸子學的興起』廣西師範大學出版社二〇一〇年

劉東、文韜編『審問與明辨：晚清民國的〝國學〟論爭』(上、下) 北京大學出版社二〇一二年

(2) 『國粹學報』は中國の通例として舊暦・太陽太陰暦で發行日等が示されているが、本稿では日本や歐米諸國と對照させるために原則として西暦・太陽暦（グレゴリウス暦）を用いる。なお清朝の年號を用いる場合は舊暦を用いる。

(3)『國粹學報』第一號　一一―一七頁

本稿では『國粹學報』は文海出版社、一九七〇年の影印版によった。

新編　原典中國思想史第三卷　「民族と國家　―辛亥革命」（二〇一〇年岩波書店）三四一―三四八頁に日本語訳があり、劉東、文韜編『審問與明辨：晩清民國的〝國學〟論爭』北京大學出版社二〇一二年等にも收録される。

(4)「論中國學術思想變遷之大勢」

且吾有一言、欲爲我青年同胞諸君者、自今以往二十年中、吾不患外國思想之不輸入、吾惟患本國學術思想之不發明。

「論中國學術思想變遷之大勢」は『新民叢報』の一九〇二年三月の第三號から四・五・七・九・十二・十六・十八・二十一・二十二號及び一九〇四年の第三年五號（總五十三號）・六・七・十號（總五十八號、十二月）に連載された。『飲氷室文集』第七册所收。

「論中國學術思想變遷之大勢」については前稿「梁啓超にとってのルネッサンス」（京都大學中國哲學史研究會『中國思想史研究』第一九號二六五―二八七頁一九九八年）で論じている。

なお、本稿では主に一九八九年中華書局版の『飲氷室合集』所收のテキストを用いて、『新民叢報』及び『梁啓超全集』（一九九九年北京出版社）を參照らして補った。『新民叢報』は一九六六年台北・芸文印書館版を用いた。

(5)三宅雪嶺「明治思想小史」丙午出版社一九一三年。本稿では近代日本思想大系第五卷に所收されたものを用い

た。本山幸彦編『三宅雪嶺集』筑摩書房一九七五年二二二頁

(6) 藤田大誠『近代國學の研究』弘文堂二〇〇七年

(7) 大久保利謙『明治維新と教育』六「學内における國・漢兩派の對立と抗爭」七「「大學規則」の制定と大學の崩壞」吉川弘文館『大久保利謙歴史著作集』四、二〇〇七年に詳しい

(8) 志賀重昂『『日本人』が懷抱する處の旨義を告白す」(明治二一(一八八八)年四月一八日「日本人」第二號)

(9) 『支那學文藪』みすず書房一九七三年所收

『芸文』 第二年第一〇號一九一一年及び『芸文』 第三年第一號」一九一二年

一體かゝる思想は、他國の種類を殊にする文明が俄に侵入し來って、自國固有の文明が其爲めに破壞されやうとし、或は破壞までは行かずとも、他國の文明の爲め自國の文明が、幾分か光輝を失ひ懸るといふやうな場合に起るものである。

(10) 坂元ひろ子『連鎖する中國近代の「知」』(研文出版二〇〇九年)「章炳麟における傳統の創造」一二六―七頁及びその注1一二四―一二五頁 ここで坂元は「傳統の創造」としての「國學」に言及している

(11) 「中國史敍論」《清議報》第九〇册、九一册 一九〇一年 文集第六册一頁

(12) 梁啓超年譜長編所收の黄公度「飲氷主人あての書簡」

丁文江、趙豐田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社一九八三年二九二―二九三頁

(13) 前掲馬克鋒『國學與現代學術』序 五頁

(14) 前掲「論中國學術思想變遷之大勢」一九〇二年

(15)「日本國粹主義與歐化主義之消長」著者不明
『譯書匯編』 第二年第五期 一九〇二年 前掲『審問與明辨』 八三―八四頁

(16)「國學發微」は原則として南桂聲・錢玄同編『劉申叔遺書』(一九三六年、台灣・華世界出版影印一九七五年)により、『國粹學報』(台北・文海出版社影印一九七〇年)を參照した。必要な場合、CD―ROM盤(『國粹學報』全文光盤文獻庫(一九〇五―一九〇二)北京大學出版社・北京大學未明文化發展公司)も使った。ただしCD―ROM盤は、『國粹學報』の畫像データである。

(17)「國學發微」は國粹學報の「叢談」欄に掲載されているが、「發刊辭」において「叢談」欄は圖畫、社説、政篇、史篇、學篇、文篇、叢談、撰録の七つのカテゴリーのうち第六のカテゴリーであり、『呂氏春秋』『淮南子』の雜家類、『稗海』『説郛』の雜叢類、清初の『日知録』『十駕齋養新録』の考訂屬等と同じく廣く考證を行うと位置づけられるものである。他に劉師培は叢談欄に「讀書隨筆」も連載していることから、『日知録』『十駕齋養新録』といった著作を意識した部分であって、最後の撰録欄は既に刊行されている書物を採録するものだという點を考慮すれば、文篇までのカテゴリーに入れようがない文章を入れていると考えられよう。つまり「國粹學報」の核心的な主張を述べる「社説」などとは別の扱いなのであり、そのことは自由に自分の意見を述べることも可能であっただろう。

(18)『國粹學報』第二十八期社説欄一九〇七年『劉申叔先生遺書』第三册一七七四―七頁

(19)『國粹學報』第三十一期社説欄一九〇七年『劉申叔先生遺書』第三册一七八三―四頁

(20)『經學教科書』第一册、上海國學保存會一九〇五年 『劉申叔先生遺書』第四册二三五一―二三七〇頁

周予同は「經學教科書」第一册を皮錫瑞の『經學歷史』と竝ぶ中國最初の系統的な經學史の通史だと評價する。（『經學歷史』序言一九二八年）

(21) 「春秋左氏傳答問」『劉申叔先生遺書』第一册三七三―三八八頁

朱冠華『劉師培春秋左氏傳答問研究』光明日報出版社一九九八年が參考になる。

(22) 劉師培の春秋學の特徴については「劉師培の春秋學」（『中國思想史研究』第一一號六一―八九頁一九八八年）で觸れているが、鄭玄以前の東漢の經學の重視は、曾祖父劉文淇以來の家學としての春秋學の特徴でもある。

【付記】なお本稿は科學研究費補助金（基盤研究（C）「東アジア近代における國學の研究」課題番號：22520043）による研究成果の一部である。